

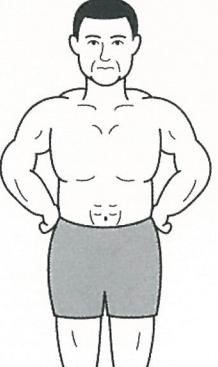
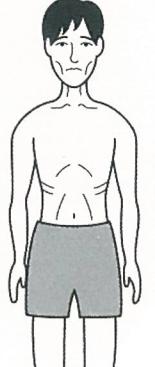
虚実について

漢方医学において、治療に必要なのが「証」の鑑別である。その証の鑑別に必要な概念の1つが「虚実」である。その証の鑑別によって適切な漢方治療を決定する。

「虚実」の概念は、広い意味で「体質」と考えていただきたい。痩せやすい人と太りやすい人、寒がりの人と暑がりの人…体質は人それぞれである。漢方は各々の体質に合わせて処方を決定する。

現在、医療用漢方製剤のほとんどは虚証、実証、その中間の中間証とに分類されている。これも患者様の体質や症状に着目しての言葉であり、「体質」・「病勢」によって判定している。

それを大まかに鑑別すると以下のようになる。

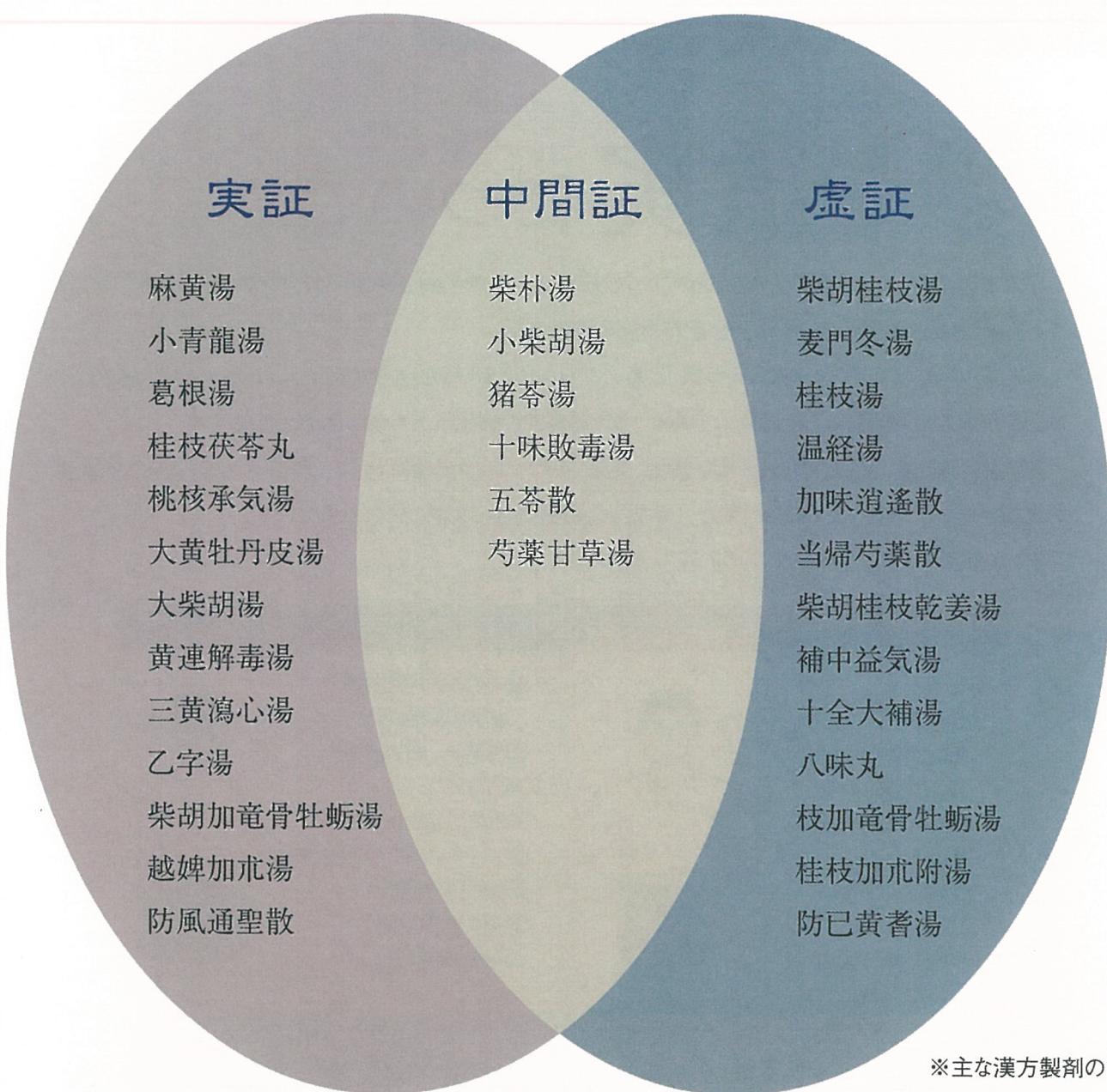
実証	虚証
<ul style="list-style-type: none"> ・筋肉質 ・肌に光沢 ・血色良好 ・声が力強い ・活動的で疲れにくい ・暑がり ・闘病反応が強い (自然治癒力が高い) ・病気の勢いが強い (高熱を発しやすい) 	<ul style="list-style-type: none"> ・痩せ型の下垂体質 (水太りも含む) ・肌が弱く、血色不良 ・声が弱々しい ・消極的で疲れやすい ・夏バテしやすく、冬は寒がり ・闘病反応が弱い ・病気の勢いが弱い (高熱を発さない) 

治療方針として、実証の患者様の場合は瀉剤を投薬し、体内の過剰な物質を排出させる治療を行う。そのため、発汗作用のあるマオウや瀉下作用のあるダイオウを配合した漢方処方を用いる。それに対し、虚証の患者様の場合は補剤を投薬し体内の不足した物質を補う治療を行う。そのため、滋養強壮作用のあるニンジンや新陳代謝をあげるブシを配合した漢方処方を用いる。

漢方の安全性・危険性

上記で紹介した証の鑑別の誤りにより、期待した治療効果があまりみられない場合や副作用を生じる場合がある。話題になった小柴胡湯も中間証に用いられ、本来幅広く用いられる処方であるが、極度に体力の低下した虚証の患者様に使用したため間質性肺炎が生じたのであろうという説もある。

実証に用いられる漢方処方に配合される生薬(ダイオウやマオウなど)は効果が強いことがある。したがって証の鑑別が困難な場合には虚証の処方から始める事も漢方治療の1つの方法として考えられている。



▶漢方解説 ①柴胡剤

柴胡剤とは、処方に柴胡が含まれる処方の総称である。その中でも柴胡と黄芩を配合した処方はとくに胸脇苦満（胸から季肋下にかけての抵抗圧痛）や往来寒熱が認められる場合によく用いられる。

代表的柴胡剤 使用目標

- 小柴胡湯：中間証：食欲不振、口中不快感や長引いた風邪で往来寒熱の認められる場合
- 大柴胡湯：実証：便秘傾向があり、胸脇苦満が顕著にみられる場合
- 柴胡桂枝湯：中間証～やや虚証：風邪が長引く場合や虚弱体質の改善に用いる場合
- 柴胡加竜骨牡蠣湯：実証～中間証：精神不安や不眠、便秘傾向を伴う場合
- 加味道遙散：中間証～やや虚証：婦人の月経異常、更年期障害、ヒステリーが認められる場合
- 柴朴湯：中間証：喘息の治療や発作予防、心因性の不安感（小柴胡湯＋半夏厚朴湯）